

## 2 人の作家から読み解く北欧神話の変容性と現代的意義

デンマーク語専攻 堀聖我

### 目次

1. はじめに
  2. Villy Sørensen: *RAGNAROK*
    - 2.1. 作家紹介
    - 2.2. 作品概要
  3. Neil Gaiman: *Norse Mythology*
    - 3.1. 作家紹介
    - 3.2. 作品概要
  4. 両作家の作品分析
    - 4.1. 登場人物
    - 4.2. 対立関係の描写
  5. 反映された作家の独自性・時代性
  6. おわりに
- 使用テキスト
- 参考文献
- インターネット資料

## 要約

現在私たちの知る北欧神話の内容は主にエッダに拠るものであり、その物語の大筋はどの文献においてもある程度一致している。最初の巨人ユミルの死体を用いて、神々がユグドラシルを中心とする九つの世界を作り、様々な種族がそれぞれの世界に生き、そしてときに干渉しあう。そして世界は終焉の時ラグナロクを迎えて滅びる運命にある。しかし、もともと口承で伝えられてきた北欧神話には失われた物語が多く存在すると考えられる。そのため後世に再話された北欧神話の中には多少の差異が確認できることがあり、そしてその差異の中に作家のオリジナリティや個性、時代性を読み取ることができるのではないかと筆者は考える。本論文は、人や時代によって受け取り方が変容し、多様な意義を与え得る北欧神話を今日的な視点から考察することで、その魅力の一端を今に伝えることを目的としている。アプローチ法として、時代も国も異なる2人の作家を選び、それぞれの再話した北欧神話を比較分析しながら論を展開する。

第2章では1人目の作家ヴィリ・サアアンスン(Villy Sørensen)の紹介と、彼の再話した北欧神話『ラグナロク』(RAGNAROK)の紹介をした。続く第3章ではもう1人の作家ニール・ゲイマン(Neil Gaiman)の紹介と、彼の北欧神話の再話である『北欧神話』(Norse Mythology)について紹介を行った。

第4章では、登場人物と対立関係の描写という二つの項目に分けて、2人の作家の作品の分析をした。登場人物の項目では、両作家が北欧神話を再話するにあたって、登場人物に与えた役割とその結果もたらされるイメージを比較しながら、2人の作家の意図を分析すべく、主要人物である3人、オーディン、トール、ロキについてまとめた。オーディンに関して、ゲイマンはオーディンに全幅の信頼を置き、彼の善性を徹底して描いているが、サアアンスは不信感をもって完璧な善になりきれないオーディンを描いているといった、対照的な描き方であることを示した。トールに関しては、ゲイマンの描くトールは善なる存在としての神の立場を保っているのに対して、サアアンスの描くトールは善なる神らしからぬ愚かな行動によって神々に災難をもたらし、神の善性を曖昧にする役割を担っていることを示した。ロキに関しては、ゲイマンのロキは原典に忠実で、災難と災難と苦しみを求める欲望こそが全ての原動力であり、単純な悪のトラブル

メーカーである。一方サアアンスンの描くロキは、単に悪を愛するだけではなく、神々への不信感を抱き、公正の神バルドルの中に潜むオーディンへの不信感を煽るという役割と、神と巨人を積極的に調停しようとする役割をも与えられていることを示した。対立関係の描写の項目では、まず神と巨人の対立の陰険の程度が二つの北欧神話の印象を変えていることに言及した。神と巨人の対立の激しいサアアンスンの北欧神話の世界観は暗く、そして二元論への反発という強いメッセージを伝えるために複雑で解釈が難しい。一方ゲイマンの北欧神話は終始明るく描かれており、小さな子供でも楽しめる北欧神話であることを示した。また、神と神同士の対立にも着目し、いくつかのエピソードを通して、ゲイマンの描く北欧神話の中では神々の間に確固たる信頼関係が築かれているのに対して、サアアンスンの場合は神と神同士でさえ互いに不信感を抱いていることを示した。

第5章ではこれまでの分析の結果導くことのできる、2人の作家の独自性と時代性についてまとめた。サアアンスンの目的は、主流である二元論的な北欧神話の解釈に挑戦し、善に内在する悪、悪に内在する善を暴き出し、絶対的線引きの持つ曖昧さや危険性を世間に訴えることであるとまとめた。また、北欧人のアイデンティティともいえる二元論的世界観についても言及した。一方ゲイマンが近年北欧神話を再話した目的は、今という時代を生きるあらゆる人々に現代の言葉で分かりやすく語られた現代的北欧神話を知ってもらうこと、楽しんでもらうことであるとまとめた。ゲイマンは子供でも楽しめるように分かりやすく北欧神話を構成し、ゲームや映画のようなメディアといった現代的特徴にも配慮して再話していることも確認した。以上を踏まえ、北欧神話は異なる語り手によって再話される価値があり、また読者は異なる北欧神話を読む価値があるという結論に至った。今回言及できたのは2つの北欧神話だけだが、過去に再話された多くの北欧神話やこれから先の未来に再話されるであろう北欧神話もまた、それぞれの時代の色を映して彩る鏡であることを筆者は確信している。